

<祈りのために>

「時を良く用い、外部の人に対して賢くふるまいなさい」 コロサイの信徒への手紙4章5節

教会はこの世から召し出された者の群れです。キリストがこの世から礼拝の民として召し出されたのです。この召しは国や父の家からの分離です（創世記12:1,2）。「あなたがたはこの世に倣ってはなりません」（ローマ12:2）と語っているように、教会はこの世に融合するのではなく、この世と別の目的を持ったキリストの体の教会の群れです。この世に腰を据えないで、キリストに腰を据える永遠の希望を目指す礼拝の群れです。

神はキリストを「すべての支配、権威、勢力、主権の上に置き、…全ての者の上に教会にお与えに」なられたのです（エフェソ1:20,21）。キリストは預言者・祭司・王職を持っておられますが、ここでは真の王として顕しておられます。教会の霊的な世界とその外側の国家と社会という二つの世界を統治しておられるからです。教会に聖霊と御言葉が満ちるとき、周辺の世界が祝福を受けることになるのです。神は、世界と全人類の統治の中枢に教会を与えられたからです。この中枢が確立してこそ、周辺が正当になるのです。中枢が確立していないならば、周囲が麻痺してくるのです。

朝鮮イエス教長老会の朱基徹牧師は、「教会に御言葉の命がないので国家にも命がない。教会に命がないのは国の滅びる原因である。国家と民族の崩壊は、教会が御言葉の命に生きていないことが原因だ」と語りました。彼は、どんなに日本帝国が圧力でねじ伏せようとも、説教職は神から受けている。そうして「一死覚悟」して、神から委託された神の言葉を日本帝国に向けて語り続けたのです。これが教会の国家に対する責任としたのです。

教会の目的は、この世界を変革することではありません。御言葉と御霊によって生きることです。そのためにこの世の課題と闘うこととなります。その結果として、この世を治療して改良・改善することになるのです。しかしそれは結果であっても、教会の目的ではありません。教会の目的は、罪の償いをキリストから与えられてキリストの義に生きることにあります。

パウロは「時をよく用いなさい」（コロサイ4:5）と語ります。これは「この時を買い戻す」という言葉からきています。市場に奴隷として売られている奴隷を自由人として買い戻しなさいという意味です。これまで「この世に売り渡している自分自身」を、キリストによって買い戻せということです。キリストによって買い戻すことは、正確にそして深くこの世の問題点を解明しながらも、神の意思から応えることです。教会はこの世と分離してはならず、しかも癒着に陥ってはならないのです。キリストから信仰を与えられた者は、世の利害を何一つ求めず、権力の上では丸裸です。キリストの十字架と復活以外に慰めを持たないからこそ、世の悪と闘うのです。こうして信仰の闘いによって、周囲の人々の間に自由と主権を育む備えをすることになるのです。

（祈り）父なる神よ、あなたの御言葉によってこの世にある問題に対して、真実の解決の道を備えるように導いてください。
川越弘（沖縄伝道所牧師）

問288 では、どのようにして、終わりの日を知ることができますか。

答 私たちはその時を知りません。これを知っておられるのは、ただ父なる神のみです。信仰者はキリストの約束を信じ、その日をつねに待望しているのです。

マタイ 24 : 36、使徒 1 : 7、Iテサロニケ 5 : 1-3、Iペトロ 1 : 13

新Q288-1 世の中には終わりの日が近いと
考え、それを20□□年だと具体的に呈示して
いる人もいて、不安になることがあります。

新A286-1 昔からそうしたことが繰り返さ
れています。1910年にハレー彗星が地球に接
近してきた時、世界中がハレー彗星が地球に衝
突し、世界が終わるのではないかとおびえまし
た。日本でもパニックが起りましたが彗星の
衝突はありませんでした。

アメリカで誕生したエホバの証人は、1914
年にこの世が終わると予言しました。奇しくも
その年に第一次世界大戦が勃発し、予言が的中
するかに思われましたが、世界の終わりは起こ
りませんでした。彼らはそれ以後もたびたび世
界の終わりを予言しています。エホバの証人に
限りませんが、終末予言がはずれてしまった宗
教団体がそれでつぶれてしまうどころか、かえ
って布教活動に熱を入れ、自分の信念に合わせ
て現実を見ることが多いという研究もありま
す。

ただし、滅亡の予言ばかりではなくバラ色の
未来論が流行するときもあります。共産主義の
理想を説くものや、科学技術の発展によって未
来は素晴らしい世界になる、というのがその典
型ですが、両者とも現在、挫折と大きな困難に
ぶつかっています。理想の追求が予想外の結果
をもたらし、ユートピアが誕生するはずだった
のにその反対のディストピアが出現するとい
うことがしばしば起こるのですが、それは人間
の限りある能力と罪がもたらした結果であり、
このことをもって理想の社会の追求まで投げ
棄ててはならないと考えます。

新Q288-2 世の終わりが迫っていることを
聖書から、具体的に説明している人がいますが、
どう考えたら良いのでしょうか？

新A288-2 エゼキエル書 38章と 39章に、マ
ゴグの地のゴグがペルシア、クシュ、プトなど
を引き連れてイスラエルに攻め寄せてくるが、
神は彼らを打ち破り、ご自分が主であることを
諸国民に示すということが書いてあります。

1980年代、宇野正美氏はこれこそ世の終わ
りであるとし、ゴグとはソ連であり、ソ連がイ
ランなどの同盟国と共にイスラエルに侵攻し
て敗北すると説きましたが、その予言は的中せ
ず、ソ連は1991年に崩壊してしまいました、

しかし今再び、エゼキエルのこの預言に我が
意を得たりと思う人が出てきました。つまりい
まイスラエルを巡って起こっていることが預
言の成就だと言うのです。この人たちに言わせ
ると、神の言葉は必ず実現する、神に敵対する
勢力がイスラエル国を征服しようと戦争をし
かけているが、神はイスラエルの側に立ってそ
れらを打ち破る、そうしてイエス・キリストが
再臨され、新しい天と新しい地が訪れる、とな
るのです。

しかし戦争と殺戮の果てに決して新しい世
界は来ません。何より、それは「剣を取る者は
皆、剣で滅びる」（マタイ 26 : 52）と言われた
主イエスが望まれることではありません。

再臨の主は「血に染まった衣を身にまとい
ており、その名は『神の言葉』と呼ばれた」（黙
示録 19 : 13）。衣を染めた血は十字架で流され
た血、武器は剣ではなく「神の言葉」そのもの
です。エゼキエル書の預言に登場する神の敵と
は、人間の中にある暗部ではないでしょうか。
聖書について早まった判断は慎むべきです。

新Q288-3 イエス・キリストは終わりの日
がいつになるか明言されないまま、それに備える
ようにと言われたのですか？

新A286-3 その通りです。「その日、その時
は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。
ただ、父だけがご存じである」（マタイ 24 : 36）
ということを超えて、勝手な予想や空想を繰り
広げてはなりません。

偽キリストが現れたり、戦争やさまざま人的
災害、自然災害が起りますが「まだ世の終わ
りではない」（マタイ 24 : 6）のであわてるこ
とはありません。私たちは、いつこの世の終わ
りが来ても良いように、いつも目を覚ましてい
るべきです。それが明日であっても、一万年後
であっても変わりありません。「たとえ明日、
世界が滅びても今日わたしはリンゴの木を植
える」、これはルターの言葉とされています。
「神が人と共に住み、人は神の民となる」（黙
示録 21 : 3）未来を見続けながら、今この世に
あって神と隣人への愛に生きていくのです。信
仰の人生をまっとうすることによってこそ、終
わり日の到来とキリストの再臨を喜び、感謝、
賛美をもって迎えることができるのです。

映画 「太陽（ティダ）の運命」

日本広しといえども、国に訴えられ、法廷で争った知事は2人しかいない。いずれも沖縄県知事である。軍用地強制使用の代理署名拒否で争った大田昌秀(任期 1990～98 年)と、辺野古埋め立て承認の取り消しで争った^{おながたけし}翁長雄志 (任期 2014～18 年)である。

この2人を主人公にした映画「太陽（ティダ）の運命」を観た。監督はTBSのNEWS23で、故筑紫哲也さんの右腕であった佐古忠彦さんである。

興味深いのは、大田県政時代、議会で知事批判の先鋒となり、知事3選阻止で暗躍したのが、当時の自民党県議の翁長雄志だったことだ。その翁長が、「集団強制死」を軍命でなかったとした教科書検定や、オスプレイの普天間強行配置を通して、次第に国への不信を持ち、結果的に自民党を離れ、大田と似た県政運営に変わっていったのだ。その背景には、共通の敵である日本政府の存在がある。

映画で「醜い日本人」という言葉が紹介されている。大田が1968年に著した本の題名である。大田は文頭で「日本人は醜い——沖縄に関して、私はこう断言することができる。」と述べている。私は映画を観て「醜い日本人」を読み返した。出版された1968年から57年が経過するが、日本人の沖縄への政策は、さらに醜くなっていると感じる。

現在、全国各地で上映されている。機会があればご覧ください。ちなみに、ティダの言葉には、リーダーという意味もある。

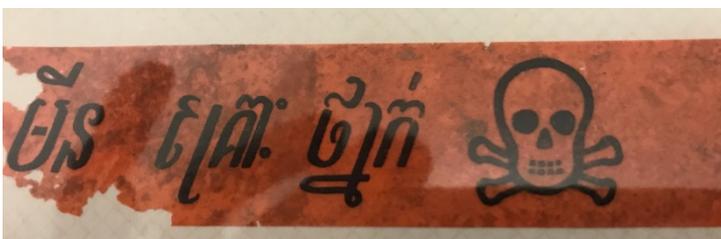
「一番残酷な武器は何だと思いますか？」

各地の9条の会や教会、学校で、沖縄の話をする機会がある。ウクライナやパレスチナのニュースの影響で「平和は大事だが、やはり軍隊は必要ではないか」という質問が増えている。私は、30年以上前の経験を話すことにしている。

1992年末、カンボジアを訪れた。国民の2割以上が犠牲となった内戦直後で、国土は荒れ果てていた。筑紫哲也はNEWS23で、カンボジア内戦で使われた武器の9割以上は、安保理の常任5ヶ国（米ソ中英仏）と独の製品である、と話していた。

長年活動をしていたNGOの事務所を訪れた際、日本人スタッフから「一番残酷な武器は何だと思いますか？」と質問された。あれこれと考えていると、スタッフは、「私は地雷だと思います」と言った。カンボジアで使われた地雷に使われる爆薬の量は、片足とか片手を失う程度で、致死量の爆薬は入っていない。一生障害を抱え続けなくてはならないという意味で、残酷な兵器だと説明した。そして、地雷はカンボジアで作られたのではなく、外国製である。カンボジアの国民が好戦的なわけではない。大量の外国製の武器を使って、同じ国民同士が争ったのである。

戦争反対！のアピールも大事だが、いかに武器を減らしていくことも必要ではないか、と思わされた。



使わなくなったテープを拾ってきました。この先は地雷が埋まっています危険だ、という意味のテープです。

西浦昭英（沖縄伝道所会員）

<靖国関連ニュース>

○<きょうの沖縄戦 1945>4月28日 木の上の軍隊／農林学校の10人

伊江島で足を撃たれた佐次田秀順さんは、この頃に山口静雄さんとガジュマルの木へ潜伏。終戦の事実はもちろん、生き残った住民が渡嘉敷島などに強制移動されたことも知らず「沖縄の人は皆殺しになった」と2年を過ごした。後に、芝居や映画となる「木の上の軍隊」の元に。佐次田さんは91歳で死去し、遺骨の太もも付近から銃弾が見つかったという。

この日、東村内福地（現在は水没し福地ダム）で激しい銃撃戦。県立農林学校による「農林鉄血勤皇隊」の10人と隊長の計11人が戦死した。2015年になって、農林学校の生徒だった名桜大学元学長の瀬名波栄喜さんの調査で、学徒の名前が判明した。

イタリアの独裁者ムソリーニが処刑される（琉球新報、25.04.28）。

○緊急事態、自衛隊明記が最優先と石破首相 少数与党下、初の憲法記念日

自民党中心の政権が少数与党となって初めての憲法記念日を迎えた3日、石破茂首相（自民総裁）は憲法改正推進派の民間団体が東京都内で開いた集会にビデオメッセージを寄せた。首相は日本周辺の安全保障環境の悪化や首都直下型地震など震災発生の可能性に言及した上で「緊急事態対応、自衛隊の明記を最優先に取り組んでいきたい」との考えを示した（時事通信、25.05.03）。

○「防衛省に自浄作用ない」自衛官がパワハラ・いじめで提訴 技術教育なく専門外の部署へ異動「国益損ねる」

防衛省の中央情報機関「情報本部」に勤務する男性自衛官が3月、専門外の部署で勤務を強いられ、パワハラで適応障害を発症したとして、国に損害賠償を求めて提訴した。自衛隊基地や駐屯地でのハラスメントを巡る訴訟は相次ぐが、防衛省内部の事例はまれ。安全保障上の機密情報を扱う組織のひずみが指摘されている。（後略、東京新聞、2025.05.06、太田理英子）。

○ひめゆりは「歴史の書き換え」 自民・西田昌司議員が発言、批判拡大

沖縄戦で犠牲になった学徒隊の生徒らを慰霊する「ひめゆりの塔」（沖縄県糸満市）について、自民党の西田昌司参院議員が3日、那覇市内で開かれたシンポジウムで、説明内容を「ひどい」「歴史の書き換え」などと講演した。この発言に対し、身内の自民党県連も含めて批判が広がっている。

シンポジウムは憲法に関するもので、沖縄県神社庁と神道政治連盟県本部、日本会議県本部などが主催、自民党県連が共催した。

複数の出席者によると、記念講演者として登壇した西田氏は、戦後の歴史教育について「でたらめなことをやってきた」と主張。その上で、「何十年か前」に訪れたというひめゆりの塔について、「今はどうか知りませんが、ひどい。説明を見ると、要するに日本軍がどんどん入ってきて、ひめゆりの隊が死ぬことになった。そしてアメリカが入ってきて、沖縄が解放された。そうい

う文脈で書いている。歴史を書き換えられると、こういうことになっちゃう」などと発言した。

さらに、「沖縄の場合、地上戦の解釈を含めてかなりむちゃくちゃな教育のされかたをしている。自分たちが納得できる歴史を作らない」とも続けた。

西田氏は朝日新聞の4日の取材に対し、発言内容を認めた上で、ひめゆりの展示や説明のどこが歴史の書き換えなのかについては具体的に答えず、「何十年か前に行った。（展示内容の）一つひとつを見ていくと、私にとってはそういう印象だった」と述べた。

西田氏の講演内容について、玉城デニー沖縄県知事は7日、報道陣に「認識錯誤も甚だしい」と語った。（後略、朝日新聞、2025.05.07）。

○憲法9条への自衛隊明記に反対 公明党「解釈の安定性揺るがす」

公明党の平木大作氏は21日の参院憲法審査会で、自民党が掲げる憲法9条への自衛隊明記に反対する考えを示した。「国論を二分するテーマに挑むことは多大な政治的エネルギーを使う。憲法解釈の安定性を揺るがす危険性があり、賛成できない」と明言した。一方、自衛隊は日本最大の実力組織だとして「内閣や国会による民主的統制の確保は、国民主権の原理からも重要だ」と指摘。憲法が定める統治機構の中に位置付けることは検討に値するとした（共同通信、2025.05.22）。

○領土と戦争を巡る思考実験

インドとパキスタンの間でまた武力衝突が起きた。両国とも「カシミールは我々の領土だ」と思っているからだ。

プーチンは「ウクライナはロシアのものだ」とネタニヤフは「パレスチナはイスラエルのものだ」と思っているから戦争をためらわない。中国は「台湾は我々の領土だ」と思っているから軍事侵攻を否定しない。「一つの中国」を尊重する立場の日本にとっては「台湾有事」は中国の内戦だ。

朝鮮を侵略した日本帝国の指導者は「朝鮮は日本のものだ」と考え、「神功皇后の三韓征伐」や「日鮮同祖論」にその正当性を求めた。吉田松陰も「幽囚録」で「古（いにしえ）の盛時の如（ごと）く」朝鮮を支配すべしと主張していた。

では日本を自分のものだと考える国があるのか。歴史上唯一の例は13世紀のモンゴル帝国だ。しかし今、中国もロシアも北朝鮮もそんなことは考えていない。尖閣諸島だけのために日本と戦争することなど、中国も台湾も考えはしない。アイヌ民族にも琉球民族にも独立戦争を考える人などいない。日本を自分のものだと考える国があるとすれば米国しかないが、日本が反逆しない限り戦争にはならない。

「日本を取り巻く安全保障環境は厳しさを増している」と政府は戦争の脅威を喧伝（けんでん）し、国民の不安や恐怖を煽（あお）るが、思考実験した結果、そんな脅威は存在しない（東京新聞本音のコラム、前川喜平、現代教育行政研究会代表 2025.05.11）。

845号ヤスクニ通信 2025年6月8日 発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会 発行・編集 桑広国（函館相生教会）

<編集後記> 6月は沖縄戦を心に刻む月です。今なお続く沖縄の基地問題を祈りに覚えます。（H. K）